

ベートーヴェンの生涯(一)

松 島 武 治

― 不幸な人は、同じような「人の不幸な人間が価値ある芸術家と人間の列に加わるために、自然のあらゆる 障害にもかかわらず、全力を尽くしたことを知って、自らを慰めるがいい！

(ハイリゲンシュタットの遺書)

十八世紀後半、封建的な中世のヨーロッパに革命の兆しが見え始めていた。フランスでは、大革命を目指して、歴史を変革する巨大な力が蓄積され、封建性の根強い旧ドイツ大帝国プロイセンでは、いわゆるシュトゥルム・ウント・ドラング以後芸術・思想の領域に多くの天才を生み出していた。

一七七〇年、同じプロイセンで、カント、ミラー、ゲーテに続く二人の新しい巨人が生まれた。一人は後にマルクス主義の源泉となった弁証法哲学の創始者ヘーゲルであり、そしてもう一人は「楽聖」ベートーヴェンである。

ルードウィッヒ・ヴァン・ベートーヴェンは、十二月十六日、ライン河畔ボン市に生まれた。彼の名は、ベートーヴェン家の最初の音楽家であり、宮廷歌手として、楽長まで出世した祖父と同じ名である。この祖父は、孫が三才の時死んでしまったが、その実直で誠実な性格は孫に受け継がれていた。

母は無教養だったが、しかし、優しい人だった。彼女は、初婚の夫に死に別れ、ルードウィッヒの父ヨハン・ヴァン・ベートーヴェンと再婚したのだった。かなり裕福な家の出身だったが、再婚後は彼女が「笑うのを誰も見たことがない」と言われているほど苦しい生活を送っていた。

父ヨハンは決して無能な人ではなかった。彼も彼の父ルードウィッヒと同じ宮廷歌手を勤め、音楽の才能を認められてはいたが、その他の点で軽率なだらしない所があった。経済的なことには全く頓着しなかった。そして酒が好きで、次第に中毒症状を起こすようになってしまった。妻と子はこの男に、妻は自分が死ぬまで、子は父が死ぬまで苦しめられた。

父の子に対する「音楽教育」は、子供が四歳になった頃から始められた。ふとしたことから、子供の才能に興味を持ち出した父は、自分の子供があのもーツアルトのような天才かもしれないと思った。

ハイドンとともに、当時のヨーロッパ音楽界を制覇していたもーツアルトは、以然「神童」の名に恥じぬ天才として活躍していた。ルードウィッヒが生まれた時、もーツアルトは十四歳で、既にヨーロッパ中を演奏旅行して回り、その異常な才能はあらゆる国の人々を驚かせていた。

ルードウィッヒにも素質はあった。しかしもーツアルトに比べ、父親は完全に違っていた。ヨハンは息子にピアノを教え、演奏旅行をして財産と地位を得ようと考えた。そのために息子に年齢を二つ若く教えたほどである。ルードウィッヒが大人になっても、しばらくは自分の年齢を二つ若く覚えていたというのは本当の話である。

ヨハンは息子に過酷な練習を強いた。次第に頑強な性格を表わしつつあったルードウィッヒは父に抵抗した。父親は暴力によって子供を服従させようとした。時には居酒屋から帰った真夜中に子供を起こし、朝まで練習させたりした。ルードウィッヒは最初の教育を酔っぱらいから受けたのである。

ルードヴィヒは、十分な学校教育を受けることもなく、一七八〇年九歳の時、クリスチャン・ゴットロープ・ネーフェと言う宮廷オルガニストから音楽を教えられることになった。ネーフェは音楽を理解する、教育能力を持った教師として子供に接した。

既にバッハの「平均律ピアノ曲集」を弾いていたルードウィッヒは、単に技術だけでなく、楽譜の読解力、曲全体の総括力などによっても、ネーフェを驚かせた。

ルードウィッヒは、ネーフェのもとで、次第にその素質をのびし始めた。十一歳の頃には、ネーフェの留守中に宮廷オルガニストの代理を勤めるまでに成長した。既にこの頃には、作曲も始められ、十二歳の時、「ドレッスラーのマーチによる変奏曲」が「十歳の少年音楽家ルイス・ヴァン・ベートーヴェンの作」と言うことわりをつけて出版された。

アルコール中毒によつて、宮廷歌手の勤めを困難にした父は、それがたまたますます酒を飲むようになった。家の中はすさんだ雰囲気になっていた。ルードウィッヒの弟や妹が次々に生まれ、そして死んだ。五人の弟妹のうち二人の弟が残っただけだった。貧困は次第に深刻になっていった。母は家の中では、何の実力もなく、夫に服従するのみで、子供が生まれては不安に思い、死んでは絶望するだけだった。そうした母にルードウィッヒは慈愛を持つて接し、父を憎み、自分の過酷な運命を憎んだ。成長するにつれ、彼はパンを稼ぐ物質上の心配が自分に課せられてくるのを痛いほど意識していった。

その頃、ルードウィッヒは、若い医師フ란ツ・ゲルハルト・ヴェーゲラーと親交を結んだ。そして彼を通じてブロイニング家を知り、その子供たちに音楽を教えるようになった。後年ヴェーゲラーは、ブロイニング家の娘エレオノーレと結婚し、ベートーヴェンとこの二人の親交は死ぬまで続いた。

ブロイニング未亡人は母親のような理解と愛情を持って、ルードウィッヒを家へ迎え入れ、彼の知らない家庭の暖かさ、社会人としての良識、高い教養などを注いだ。

ルードウィッヒをモーツァルトに会わせようと考えたのは、ボンの先選候帝マクシミリアン・フ란ツの臣下ヴァルトシュタイン伯爵だった。彼は、ネーフェと共に、ルードウィッヒの才能を認め、ぜひ音楽の中心都市ウィーンへやらせようと考えた。

一七八七年、春、ルードウィッヒは初めてウィーンに旅行し、モーツァルトに会った。当時二十八歳だったモーツァルトは、既にハイドンをしのぐ円熟度を持ち、最近作「フィガロの結婚」その他の作品によって圧倒的な名声を得ていた。

ルードウィッヒはモーツァルトの前で即興演奏し、その素質をモーツァルトに認めさせた。モーツァルトはそのことを、同席していた友人に話したと言われている。が、モーツァルトとの会見は、これが最初で最後であった。わずか四年後、想像を絶する貧困のうちにモーツァルトは長逝してしまうのである。

ボンに帰ってまもなく、ルードウィッヒの母マリア・マグダレーナが肺結核で死んだ。父の酒癖はますますひどくなり、翌年には父の歌手としての俸給の半分が直接ルードウィッヒに支払われるようになった。そしてついに父は宮廷歌手の役職を罷免されてしまった。

ルードウィッヒの生活上の困難は一段と増え、父を含めた家族全部のものが、ルードウィッヒの労働によって養われるようになった。

一七八九年、ルードウィッヒは創立されたばかりのボン大学に聴講生として通学し、哲学やギリシャ文学を学んだ。特にカントの影響を受けたが、ギリシャ文学を担当したオイロギウス・シュナイダー教授はジャコバン党員で、ルードウィッヒはこの人から急進的な共和主義の思想を学んだ。これはその後の彼の世界観として生涯変わることなく、彼の生活や作品にも深く浸透していった。

翌年、ルードヴィッヒは、ロンドンへ行く途中、ボンに立ち寄ったハイドンと会った。さらに一七九二年、ハイドンがロンドンから帰った時再開し、ウィーンに出て彼に師事するよう勧められた。ヴァルトシュタイン伯爵やネーフェはこの機会を逃さず、ルードウィッヒをウィーンに行かせるようフランス選候帝に進言した。音楽好きのフランスはこれを取り上げ、ルードウィッヒ・ヴァン・ベートーヴェンをウィーンに送り出すことを決定した。ルードウィッヒはこの時二十一歳であった。

ウィーンでのベートーヴェンの勉強が始まった。彼は、ハイドン、ヨハン・シェンク、アルブレヒツベルガーなどから対位法、フーガ、イタリア歌曲の作曲等を学んだ。

彼は既にこの頃「さらに美しいためには破り得ぬ規則は無い」という覚書を残している。作曲は次第に円熟を増し、一七九五年頃には、作品一の三曲の三重奏曲や作品二のピアノソナタ三曲、その他が作曲された。

しかし、ベートーヴェンがウィーンに来てまず人々を驚かせたのは、ピアノによる即興演奏だった。

カール・フォン・リヒノフスキー公爵は、ボンの友人、ヴァルトシュタイン伯爵から「彼（ベートーヴェン）はいつかきつと第二のモーツァルトになるでしょう。」と言う手紙を受け取り、ベートーヴェンに大きな関心を持った。そして自分の家に彼を招き、ウィーン在住の有名な音楽好きの貴族を集め、そこで当時ウィーン第一の即興演奏家ゲリネック神父と腕くらべをさせた。

その結果、集まった誰もが、ゲリネック以上の手腕と素質をベートーヴェンに認め、ウィーンでは全く無名であつたベートーヴェンは、この席上で劇的なデビューを飾った。

ベートーヴェンの名声は、一躍ウィーン中に広まった。重要で有名な晩餐会のサロンに、彼は必ず現れた。追従を知らないベートーヴェンをピアノに座らせるために、ひざまずく伯爵夫人もいた。彼の演奏は決していいえでも優雅でもなかったが、生命力ともいうような力強いものが、全体を貫き、聴者を圧倒してしまうのだった。演奏後、感動して涙を流している夫人たちの前で、彼はよく嘲けるような哄笑を浴びせた。（後年、彼はベッティーナへの手紙で「音楽は、人々の精神から炎を打ち出さなければならぬ」と書いている。）

一七九七年、彼はドイツを演奏旅行し、プラークやベルリンではウィーンと同じように大成功を収めた。

一八〇〇年、四月、ウィーンで開かれた演奏会では、モーツァルトやハイドンの作品と並んで、ベートーヴェンの作品が発表され、彼は初めて公衆の前に現れた。

彼の作品はよく売れた。彼はヴェーゲラーにこんな手紙を書いた。

「・・・たとえば今、一人の困窮している友人に僕が出会う。僕の財布があいにく彼を助力してやれない時、僕は自分の机に向かって座りさえすればいい。たちまちその友人は助かるわけだ。これは素敵な状態ではないか・・・僕の芸術は、貧しい人々のために最も役立たねばならないのだ・・・」

もつとも、当時はまだ楽譜の出版だけで、作曲家の生計が成り立つほど資本主義社会が発達していなかった。誇りの高いベートーヴェンに「友情の証し」の名目で送られる援助がなくては、彼は決して生活できなかった。ベートーヴェンを物心共に援助し、彼から作品を献呈されたことによつて、歴史に名を残した貴族は多い。

とはいえ、この頃はベートーヴェンにとつて生涯で最も華やかで裕福な時であつた。創作と家庭教師の仕事は彼を多忙にした。二十曲近いピアノソナタ、六曲の弦楽四重奏曲、三曲のピアノ協奏曲、そして第一交響曲などが、こうした状況の中で作曲された。

ベートーヴェンが耳の疾患に気づいたのは、一七九六年、彼が二十六歳の頃だといわれている。ベートーヴェンをベートーヴェンたらしめたとか、彼を苦悩の生涯を生き抜いた人という場合に必ずいわれるこの病氣は、九八年頃には既に相当に進み、激しい耳鳴りや難聴が頻繁になつた。

彼は極秘に治療を進めた。音楽家にとつて耳が聞こえないということは致命的な問題である。元来、その粗野な性格にかかわらず人と接することの好きな彼は、このことのためやむなく社交を避けなければならなくなつた。

彼を支持する多くの貴族や友人が、偏屈なほど自我を主張する彼から多くの罵倒や辛辣な皮肉を受けながらも（そしてそれらは決していつもベートーヴェンが正しいわけでもなかった）、彼に対する支持をやめなかったのは、彼のそうした粗暴な性格の裏には親切や比類のない誠実さや子供のような純朴さを見ていたからである。彼等はベートーヴェンの音楽の天才性を尊敬するだけでなく、彼という人間をも愛していたのである。

このようなベートーヴェンが、人々から遠ざかり、自分の病氣について一人で悩まなければならなかったことは大変な苦痛であつた。

一八〇一年、ついに彼は友人のカール・アメンダと、ボンにいるヴェーゲラーに手紙を書き、自分の病気と苦悩をうちあけた。

あらゆる治療が徒労に終り、耳の状態はますます悪くなるばかりだった。時には全く絶望し、自殺を考えたりした。

一八〇二年、ベートーヴェンは毎夏を過ごしてきたハイリゲンシュタットの片田舎で遺書を書いた。それは自殺のためではなく、今まで病気を隠してきたことからきている人々の誤解を解くために書かれたものであった。

その中には、耳の疾患による絶望の底からはい上がってきたベートーヴェンの、生きることへの哀願が全文をつらぬいている。秋深くなった寂しい片田舎で、彼は孤独に耐え、自分に過せられた過酷な運命と戦いながら生きていこうと考えたのである。

(以下次号)